（様式１）

資料２－２

バリアフリーの街づくり取組み推進状況モニタリング現地確認結果報告書

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 対象事例名 | | ユニバーサルデザイン親子体験講座2013 |
| 対象団体名 | | 茅ヶ崎保健福祉事務所 |
| 現地確認日時 | | 平成26年１月19日（ 日 ） 10:00～13：00 |
| モニタリング  グループ | | 〔リーダー名〕斉藤進 |
| 〔メンバー名〕佐藤光良、下村旭、鈴木治郎、花方威之 |
| 検　　証　　項　　目 | | |
| 先進性 | ・地元学区の青少年育成推進協議会と小学校が連携して呼びかけを行い、その結果、児童と保護者が参加する親子体験講座の開催につながった。  ・地元小学校の教諭が参加するなど、当該事業に対する学校側の理解が高い。 | |
| 共感性 | ・親子で一緒になって学習・体験することで、講座終了後、家庭で共通の話題とすることができ、バリアフリーへの理解が深まることが期待される。  ・体験や介助犬とのふれあいを通して、バリアフリー社会の実現に向けた課題が明らかにされ、その理解が深められた。 | |
| 利用者の視点と県民ニーズの反映度 | ・介助犬による実演は、子どもたちが直接目で見て、直にふれあうことができ、介助犬利用者への理解が高められた。 | |
| 波及効果 | ・こうした親子体験講座は継続し、地域に拡大・展開することが重要であり、今回の取り組みは、そうした地域社会への拡がりを生み出すきっかけとなるものである。 | |
| その他 |  | |
| 所見 | ・講座全体の構成として、子どもたちの興味・関心を引きつけるため、資料説明より体験学習に重点を置いたプログラムの工夫・改善が求められる。  ・参加した子どもたちが、講座の中で何を感じ、どう考えたかを話し合ったり、発表する場（体験成果の共有、分かちあいの時間）が必要である。  ・ユニバーサルデザインの説明内容（ＵＤ７原則など）は、小学生５・６年生には理解が難しいと思われる。そのため、むしろＵＤ製品の実物を多用し、子どもたちに分かりやすいクイズ形式で考えさせたり、市内での具体事例を紹介するなどして、それらの配慮や工夫している点を説明することが望まれる。  ・予算面・運営面から開催回数（年１回）や定員数（今回定員15名）の制約は理解できるが、せっかくのバリアフリー学習の機会であるにもかかわらず開催回数や参加者が極めて少ないのが残念である。そのため地域社会への展開が制約されている。  今後は、こうした体験講座の地域への拡がりが求められることから、地元の市民組織や障がい者団体と協力し、開催回数などを増やすことが求められる。  なおこのための事前準備として、学校教諭に対するリーダー育成講座を開催し、体験講座運営のための人材を育成したい。またこうした取り組みが進めば、各学校内でのバリアフリー教育へもつながり、総合の学習などへの活用が期待される。  ・こうした講座では、参加者が初めて顔を合わすため互いに緊張感を持っている。そのため、当初、参加者の心を解きほぐす仕掛け（アイスブレーク）が必要である。（例えば、氏名や趣味を紙に書き出し、それを自由に歩き回り見せあいながら参加者同士で面白、楽しく自己紹介などを行う。）  ・会場の椅子の配置も通常の教室型とせず、ワークショップ型のみんなで一緒になって体験し、考える囲い込み型（囲炉裏端方式）としたい。 | |